

三留にあったお城

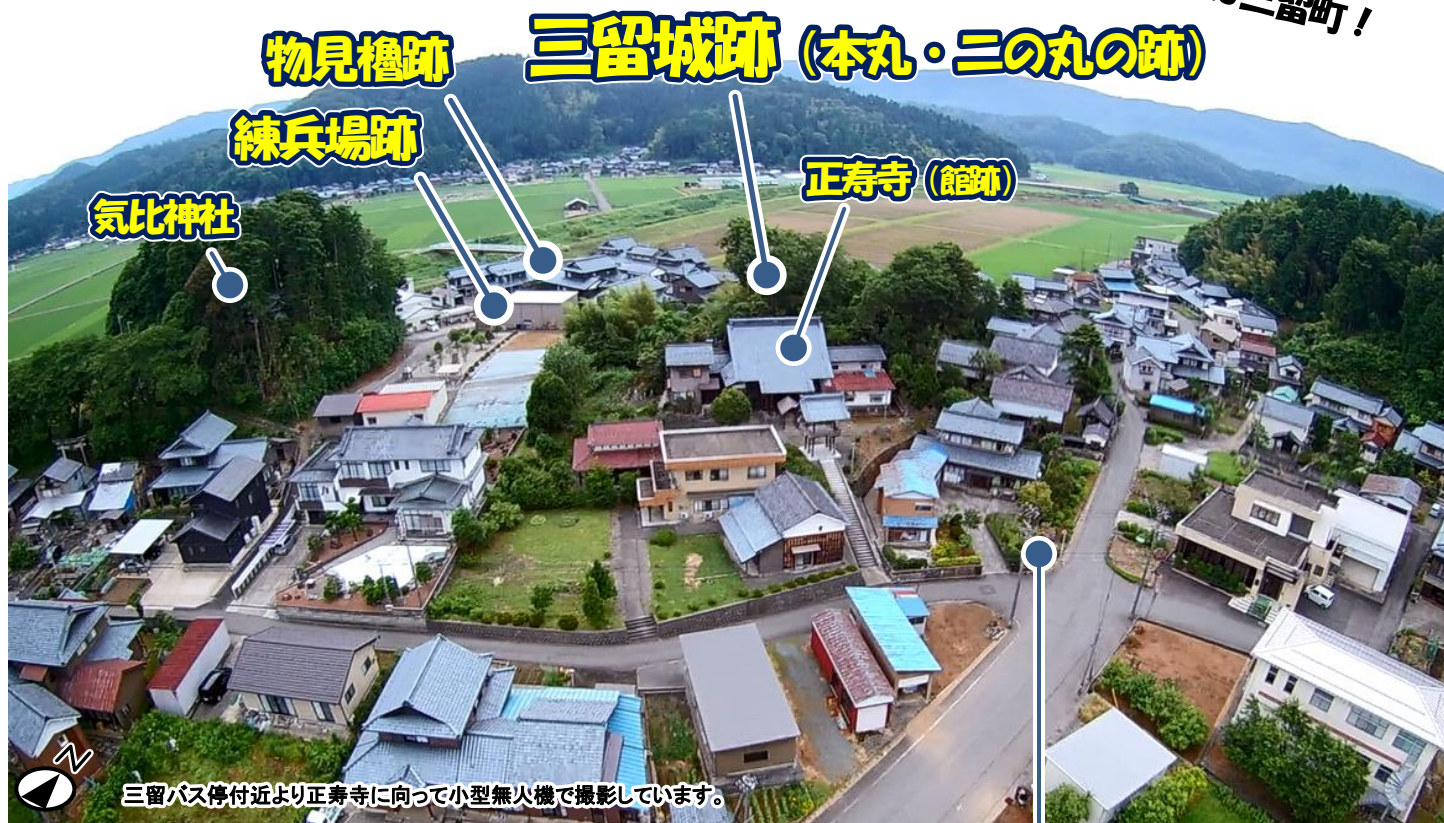


A SPECIAL EDITION
by Teamぶらひがし

三留城跡の辺りは、朝倉氏によって一乗谷西方の山城として館を築き住んだ所です。城の規模は小さいですが、正寿寺の丘の頂に本丸・二の丸があり、正寿寺のある三留城に館があったと推定されています。

三留町のおもしろい
ネタをご紹介します。

今回は三留町！



三留バス停付近より正寿寺に向けて小型無火機で撮影しています。

※ 史跡看板の内容です。

三留城は、一乗谷朝倉氏の初代敏景の六男景儀(かげのり)の子、孫六郎景冬が築いたと伝えられています。五位山の頂(※)に本丸址があり、正寿寺のある三留屋敷に館がありました。三留城は景冬の弟景総(かげふさ)、その子景久(かげひさ)へと受け継がれ、景久の子千代雅丸(ちよがまる)が正寿寺の住職となって父祖の菩提を弔ったそうです。

※ ここでの五位山の頂とは、正寿寺北側の丘の頂の事です。



※ 三留城跡は市指定の文化財です。

三留町のおいたち

三留町は三方村(旧清水町以前の村域)の前身的な意味をもつとともに、三留の郷のもとともなっているとされています。

三方という言葉の発祥は、日野川、志津川、天王川の三つの川を中心とした流れが、一か所に集って、渦のようになっていました。それで三つの渦の村から、「三渦」と呼び、「三方」と宛字で書くようになったと言われています。

また古文書の中には「三溜」という字が所どころにみられます。これは、三つの川が集まった所の意味をあらわすものと思われます。

時代が流れ、河川の改修が行われて、湿地が乾地となり、何時の間にか「みため」が「みとめ」と訛って「三留」と宛字を書くようになりました。

住みにくかった三留の地も、今まで山の上に住んでいた人たちがだんだん下におり、また他の地方から移住してきた人もあり、現在の住みよい村になりました。

この三留に朝倉氏の一族が城をつくって、住んでいたのも、今住んでいる人びとの中には、朝倉一族や気比神社社司一族の血を引いているものも多いということだそうです。

記事引用:清水町のむかしばなし

お城があった名残

今でも、お城にちなんだ小字名が残っています。三留町41字の「後垣内」や61字の「御陳垣内」などがそうです。

「後垣内」は、もともと「御城垣内」でしたが、三留城の落城後、更地になってしまったので、近隣住民が木を植えたところ、後年巨木になりすぎ、その木の北側は日陰でうっそうとしてしまいました。その木の後ろ側ということで、後世、「御城垣内」から「後垣内」(※おしろ→うしろ)となまってしまい読みが変わってしまった、という面白い言い伝えがあります。

また、「御陳垣内」については、地元三留町では、(ごぜんがいち)とも読んでいるようです。(ごぜん)とは、奥方様の事であり、奥方様に関する何か(館?)があったのかもしれないとも言われています。なお、もともとは「陳」という字は「陣」でした。どうして漢字が変化したかについてははっきりしていませんが、「陳」「陣」いずれも陣立ての意味があり、先陳・本陳(せんじん・ほんじん)などと書かれた様々な史料も多いため、古くから「陳」「陣」が併用されていたのではないのでしょうか。

地形図の出展: 国土地理院ウェブサイト

41と61字の赤い破線はおおよその場所です。目安として考えてください。



「五位山」という名の由来



「五位山」という名の由来は、5カ所の山や丘の頂がある(あった)場所という地勢から名づけられた地名(小字名)だそうです。

三和橋付近より東に向かって小型無人機で撮影しています。